

教 仏 名 聞

第62号
(発行日)
2015年11月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638113 西宮市
甲子園口2丁目7-20
電話・FAX (0798)
63-4488
(発行人) 土井紀明
mail:bachkantata2mubansou@zeus.eonet.ne.jp
http://www.eonet.ne.jp/~souan/

《 聞法会ご案内 》
○〈同朋の会〉
毎月22日 午後2時始。
○〈念仏座談会〉
毎月2日と12日午後3時始
○〈聖典学習会〉
毎月6日午後7時始。
○〈真宗入門講座〉
毎月18日午後6時30分始。
* 8月は2日の念仏座談会と6日の聖典学習会以外は休み。

観 音 勢 至 も ろ と も に

観音勢至もろともに

慈光世界を照曜し

有縁を度してしばらくも
休息あることなかりけり

宗祖「讚阿弥陀仏偈和讃」

現代語訳（阿弥陀如来様のお脇侍である観音菩薩と勢至菩薩は、慈悲の光明によって迷いの世界を照らし、それぞれの菩薩に縁のある衆生を救済して、しばらくも休むことはない。）

* * *
このご和讃は曇鸞大師の『讚阿弥陀仏偈』の中にあります一文、

「観世音・大勢至は、もろもろの聖衆において最第一なり。慈光、大千界を照曜し、仏の左右に侍して神儀を顕す。もろもろの有縁を度してしばらくも息まざるごとし。大海の潮の時を失せざるがごとし。」をもとにして作られた、親鸞聖人のお歌です。

観音菩薩と勢至菩薩は、阿弥陀仏と別の存在ではありません

勢至菩薩が仮に善知識となつてこの世に現れて私を導いて下さったともいえましよう。

あるいは直接、

仏法に関わりがなくても、非常に困窮して食うに困つていようなときに生活の面倒をみてくれた慈悲深いお方は観音菩薩がその人となつて情けをかけて下さったのかも知れません。

そういうさまざまなき縁をいただき、助けとなつて下さり、さまざまなお導きを受けて、今日まで生き、仏法をいただく身にならしていただいたのは、観音・勢至のお働きを長く蒙つてきた、ともいえましよう。

それを観音・勢至様の側から言えば、

「観音勢至もろともに 慈光、世界を照曜し 有縁を度してしばらくも 休息あることなかりけり」

で、慈悲と智慧の光明でもつて迷いの世界を照らし、休みなく活動し続けてられて、私たちが救いに至らしめて下さっている、といわれるのです。

ここで一つ問題提起をしてみましよう。

「阿弥陀仏や観音・勢至様は慈悲の光でもつて働きづめである、ということですが、一体どこに働いて下さっているのでしょうか」という点です。

現代、この和讃のようなお話を聞くと、架空の話に思えて疑つたりします。それで「仏や菩薩がましますとか、働いておられるとか、仏に救われるとかいうけれど、どこにそんな活動があるのか、どこにも確認できないではないか」といわれることが少なくありません。

この点を仏教の教えに尋ねてみたいと思います。

まず、阿弥陀仏や菩薩方が直接的に働いて下さっている領域はどこかということですが、それは心の領域といつていいのでしょうか。

そこで、分かりやすいように、物質の領域と心の領域とを便宜的に分けて考えてみたいと思います。

私たちが普通、知ることができるのは、目に映って見える物質の存在（一部）とその現象です。目の前に机がありベッドがあり、いろいろな人々がいます。樹木があります。これは太陽などがあります。これ

らの目に見える存在はみな物質の存在やその現象といつていいでしょう。空気も水も家も妻も夫など、見たり触れたりして確認されるものは、物質現象ばかりです。物質現象しか見えません。いわゆる知覚してお互いがともに確認できるものはすべて物質存在、物質現象といえましょう。

これに対して、物質を物質と認識し、物質現象を観測し、知覚し、判断し、考えたり感じたりしているそのもの、それは意識すなわち心であります。

私たちは、心の働きはとかく小さな現象のように思っています。そうではないと思います。

目の前に机があり樹木があり人がいる、あるいは太陽があり月があると「知るはたらしは」(心)は月や太陽などの天体さえも入れ込むほどの、広大な働きであるともいえましよう。目(見る用き、見る意識)は天上の月の姿をも取り込みます。宇宙を観測している天文学者が、広大な宇宙の事象を知ることができるのは天文学者に「心」があるからであつて、心がなければ、一切何も分かりませんし、人

生もありません。宇宙どころか、目の前の新聞も机も、家族も、樹木も何も分かりません。自分の身体も心がなければ、「身体」ということも分かりません。心というものは実に不思議な働きであり、物質的な空間とは「異質な意味」で広大な領域であることが感じられます。目に見えるのは外の物質(物質の一部)だけしか見えません。心は見えないのです。

このように物質面と意識の面の、二面ある私。いわば私は肉体と心が一つになっているといえましよう。しかも、心の方が私の主体であり、肉体はむしろ外側といえましよう。心こそ当面の「私そのもの」であります。

さて、ある学派の仏教では心の領域はおよそ三つの領域に分けて説かれています。

それは、私たちが日常感じており意識している表層意識。そして表層意識の下にある個人的な無意識あるいは深層意識。深層意識があることは仏教では早くから知られていますが、西洋では二〇世紀になってフロイトとかユングといった精神科学者によって唱えられるようになりました。

自分で自覚的に知られる意識としての表層意識。それだけではなく、眠っているときも気絶しているときも働いている深層意識の領域があることは分かります。

そして、自分では意識できない深層意識(無意識)には我執我愛の心とか、さまざまな情念や煩惱の因、あるいは今までの経験したことの印象が蓄積(薰習)しているのだと仏教では教えられます。

「我と我が身に執着する心」「どこまでも生きたい、生きたい」という本能とでもいうような心なども個人的な無意識の領域に属するのでしよう。

それで仏教(「大乘起信論」など)では、表層意識を粗大な意識(六粗)とし、深層意識は微細な意識(三細)と言います。

そしてこういう個人の粗大な意識と微細な意識は、無明(迷い)による我執我愛で固まっております、それを迷いの心あるいは凡心と言っています。

これが私たちの心であります。こういう心全体を、ごく身近に「たとえ」てみますと、氷山の固まりのようなものではないでしょうか。冷たく固まっている氷山の一つが私の

心であると。

そして日常の表層意識は氷山の一角として海面に出ている部分であり、日常では知られない深層意識(無意識)は水面下の氷の固まりであります。しかも水面下の氷は表面の氷よりずっと大きいですね。他者も同じ一つの氷山で、氷と氷が海面であい対しているのではないのでしょうか。時にはそれこそぶつかりあつてしまします(争い)。

大きな海に浮かんでいる一つの冷たい氷の山、しかも海面下には見えない大きな氷の固まりがある、というイメージです。それが私の心の姿です。

そして表層意識の氷は海面の広大な空間、いわば物質的な領域に直接しているといえましよう。

そこで海面を境に海面から上を物質的な領域としたら、大海は心の領域とイメージできます。

さらに、心の領域の三つ目ですが、氷山がそこにおいてある大海の海水そのものは広大な無量の心であるといえましよう。

海水が冷たく固まった一つ一つの氷の固まりが個々の生

き物(衆生)ですが、それはしかし、無量の海水に包まれていきます。この海水は無量無限であり、無数の氷山を包んでいます。

そして仏教では、この包んでいる無量の海水とたとえられる心は仏心(光明心)であると聞きしています。ですから私たちの心(凡心。煩惱心)は仏心に包まれているのであります。

そういう意味で、心の領域は個人的な表面の意識と個人的な無意識の領域、そして広大な仏心(光明心)の領域とのいわば三相になっているといえましよう。

しかし、凡心は仏心を知らず、仏心を離れ、氷のように冷たく固まり、他の氷と対立し続けてきたと言っているでしょう。我執で固まって苦しんでいる状態から解放されずにいる私たちであります。

そんな私たちに無量の海水である大悲の仏心が、氷の固まりである私たちに大悲心をもって働きかけ続けて下さっている。そして、遂には氷を溶かして同じ海水(仏心)にしようとして働きかけ続けて下さっている。こういう働き、それが阿弥陀仏の光明であり、ここでは観音菩薩や勢

至菩薩としてお示し下さっているのであります。

私たちは私の知らぬまから、阿弥陀仏の仏心大悲に働きかけられているのです。その具体的な働きが今、口に現れて下さる南無阿弥陀仏なのです。「まるまる助ける」「引き受ける」「仏にするからわれをたのめ」と南無阿弥陀仏ナムアミダブツと喚びかけて下さっているのです。

ですから阿弥陀仏の救いとその対象としての私たちは、仏心と凡心、心と心の関係であり、心の領域でのことがらとして説かれています。

それを外の空間的、いわば物質的な領域でのことがらと考えると、当然仏や菩薩の働きを「確認」したり「実証」することはできませんから、分からなくなってしまう、阿弥陀仏や菩薩の働きを架空の話であると疑い捨ててしまうのではないのでしょうか。

ですから観音菩薩や勢至菩薩のお働きは、目には見えないう心の領域での働きを象徴しているのであって、それは見えませんが、かぎらない智慧と慈悲の光（心光）として休みなく働きづめに働いて下さっているのです。 (了)

真宗信心の問

【問】

南無阿弥陀仏の「南無」は帰命であり、「マカセヨ」という阿弥陀仏の仰せということに分かります。しかし、南無阿弥陀仏の「阿弥陀仏」は「助ける」という意味だということですが、なぜ「助ける」という意味になるのでしょうか。

【お答え】

南無阿弥陀仏は阿弥陀仏の私たちに喚びかけたもう仰せであり、それは「タノメ、タスメル」の意味と言われます。「タノメ」とは「マカセヨ」ということであり、「阿弥陀仏は「タスケル」というお心であるといわれています。

この「タノメ、タスケル」のいわれはどこから来たかといえますと、阿弥陀仏の第十八願のお心からです。第十八願は仏説無量寿経に「設我得仏 十方衆生 至心信樂 欲生我國 乃至十念 若不生者 不取正覺 唯除五逆誹謗正法」とある仏語からです。

「至心 信樂 欲生我國」とは「弥陀の誓いをまこと（信心）と信じて（信樂）我が国に生まれると思ってくれよ（欲生我國）」の阿弥陀仏の思し召しであり、中心は「信ぜよ（信樂）」です。「信ぜよ」とは信賴せよであり、「マカセヨ」で「タノメ」の意味となります。

そして「乃至十念 若不生者 不取正覺」は「十念に至るに及ぶまで、若し生まれずば正覺を取らじ」ということで、「十念」は「十声」の念仏であって、「たった十声なりとも念仏申すばかりで、若し生まれずば正覺を取らない」となります。つまり、「口にただ念仏申すばかりで、必ず浄土に生まれさせる、助ける」の意味になります。「ただ称えるばかりで助ける」は「そのまなりで助ける」であり、つづめれば「まるまる引き受ける」「タスケル」のお心となります。

ですから第十八願は、「まるまる助けるから、我をタノメ」の阿弥陀仏の仰せ。それが倒置法になって強調されていて、

「タノメ、そのままなりをタスケル」との絶対的な救いを告げるお言葉であります。

「そのままなりで汝を助ける」は「そのままなりを撰め取つて捨てず、かならず浄土へ連れていく」との思し召しですが、私たちがまるまる撰め取つて助けたもうゆえ、「撰取して捨てざれば阿弥陀と名づけたてまつる」（浄土和讃）で、このお働きを「阿弥陀仏」と言われるのです。こうして「撰め取る」「タスケル」は「阿弥陀仏」の内容になります。

阿弥陀仏が、「汝の罪と行く末は弥陀がまるまる引き受けるから、我にマカセヨ」との大悲心は「タノメ（南無）タスケル（阿弥陀仏）」と喚びかけたもう、それが南無阿弥陀仏の名号のいわれです。

【問】

十八願を成就して南無阿弥陀仏の名号となっておられるというの、聖典のどこに書かれているのでしょうか。

【お答え】

それはまず仏説無量寿経の第十七願に名号が讃えられ、法蔵菩薩は名号となつて聞かせたいと誓われました。そしてこのお経の本願成就文には

「あらゆる衆生、その名号を聞きて、信心歡喜せんこと、乃至一念せん。心を至し回向したまえり、かの国に生まれんと願すれば、すなわち往生を得て不退転に住す。」と説かれています。詳しくはここで書けません、名号を聞くところに、真実信心が人（機）の上に与えられ、二度と迷いの世界に退転しない身になると、釈尊はここでお説きになっていきます。ここに第十八願のお助けは、名号を聞くところに実現すると説かれています。ということは第十八願の「まるまるのお助け」は、名号として私たちに聞かせることを通して私たちにその救いを実現して下さるのであります。いわば第十八願のお心は、南無阿弥陀仏の名号として私どもに回向され聞かされるといふことです。

こうして十七願において、名号（名聲）を私たちに回向して聞かせようと誓われているのですが、それは大経の第十七願の意趣である重誓偈の文に

「我仏道を成るに至りて名 声 十方に超えん。究竟して聞こゆるところなくは、誓う、正覺を成らじ」と説かれています。 (了)

